

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 5 年 6 月 21 日現在

機関番号：34606

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2022

課題番号：16K12259

研究課題名(和文) 看護診断を基盤とした在宅用標準看護計画の策定およびその有用性の検証

研究課題名(英文) Formulation of home care standard nursing care plan based on nursing diagnosis and verification of its usefulness

研究代表者

奥田 真紀子 (Okuda, Makiko)

天理医療大学・医療学部・教授

研究者番号：00390211

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、在宅で頻度の高い事象の看護診断名に対する在宅用標準看護計画を策定すること、全国の訪問看護ステーション5240で使用する看護診断名を調査し、策定した看護診断名の妥当性をはかること、在宅における看護課題の着眼点と看護計画が持つ課題を明らかにすることであった。その結果、便秘、介護者役割緊張、皮膚統合性障害等、15の看護診断名に対する在宅用標準看護計画を策定し、その診断名の使用頻度が高いことが全国調査によって確認できた。訪問看護計画の課題は、看護課題やその関連因子が不明確なものは73.6%であり、看護介入によって評価できない内容が多く見受けられたことであった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、訪問看護ステーションに対する全国調査により、訪問看護師が介入する看護課題を明らかにし、さらにその看護課題に対する在宅用標準看護計画を策定したことは、訪問看護における活用および訪問看護実践の可視化につながる点に意義がある。さらに、訪問看護計画において看護課題とその関連因子が不明確であるものが73.6%見受けられたことにより、看護課題の根拠が不明確である可能性があり、訪問看護計画における今後の課題への示唆が得られたことは、今後取り組む課題が明確になった。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study is to formulation of home care standard nursing care plan for nursing diagnosis names of frequently occurring events at home, investigate the names of nursing diagnoses used at 5240 home-visit nursing stations nationwide, and determine the validity of the nursing diagnosis names that have been formulated. It was to clarify the point of view of nursing issues at home and the issues of nursing plans. As a result, formulation of home care standard nursing care plan was formulated for 15 nursing diagnoses, such as constipation, caregiver role tension, and impaired skin integrity, and a nationwide survey confirmed that these diagnoses were frequently used. As for the issues of the visiting nursing plan, 73.6% of the nursing issues and their related factors were unclear, and there were many contents that could not be evaluated by nursing intervention.

研究分野：地域・在宅看護学

キーワード：在宅用標準看護計画 看護診断 看護課題 関連因子

## 1. 研究開始当初の背景

2025 年にむけて看取りを含めた医療ニーズの高い在宅療養者が 1.5 倍に増加すると見込まれており、安心して療養が継続できるしくみのである地域包括ケアシステムの推進が謳われている。このような中、生活面と医療面の両側面からアセスメントができる訪問看護師が、看護師間の連携を強固にし、多職種連携の牽引役を担うことが期待されている。しかしながら、訪問看護師が、看護の知識体系と経験にもとづいて、どのような点を看護上の問題として着目し、実践・評価しているのか可視化されておらず、他職種のみならず他施設看護師も理解しにくい現状がある。

そこで本研究では、(研究 1) 在宅において課題となる頻度の高い看護診断名の事象に対する在宅用標準看護計画を策定すること、(研究 2) 全国の訪問看護ステーション 5240 で使用する看護診断名を調査し、策定した看護診断名の妥当性をはかること、(研究 3) 訪問看護師が「看護介入の着眼点」として何を看護上の課題にあげ、どのように示しているのかを明らかにし、在宅における看護計画が持つ課題を検討した。以上のことより、訪問看護師の実践の可視化を試みた。

## 2. 研究の目的

(研究 1) 在宅において課題となる頻度の高い看護診断名の事象に対する在宅用標準看護計画を策定すること

(研究 2) 全国の訪問看護ステーション 5240 で使用頻度の高い看護診断名を調査し、策定した看護診断名の妥当性をはかること

(研究 3) 訪問看護師が「看護介入の着眼点」として何を看護上の課題にあげ、どのように示しているのかを明らかにし、在宅における看護計画が持つ課題を検討すること

## 3. 研究の方法

### (研究 1)

1) 訪問看護ステーション所長 1 名、訪問看護ステーション主任 3 名、認定看護師 2 名、在宅看護学に関わる教員 2 名で策定チームを構成した。

### 2) 在宅用標準看護計画の策定方法

在宅において使用頻度の高い 15 の看護診断名の抽出 文献より 59 診断名を抽出  
策定チームメンバーの訪問看護ステーションにおける 100 事例の看護診断名を調査し、23 診断名を抽出・策定メンバーの合議で 15 診断名を抽出

### 3) 15 診断名

- ・介護者役割緊張・非効果的コーピング・非効果的気道浄化・非効果的呼吸パターン
- ・活動耐性低下・セルフケア不足・身体可動性障害・感染リスク
- ・誤嚥リスク状態・身体損傷リスク状態・転倒・転落リスク状態・皮膚統合性障害
- ・便秘 ・社会的相互作用障害 ・安楽障害

### 4) 在宅用標準看護計画策定の方法

原案(個人作成) NANDAI - NIC - NOC その他の文献  
ステーションで訪問している事例(高齢者・小児・精神・難病等)で立案した標準看護計画が使用可能な内容であるかどうか確認する

### 5) 在宅用標準看護計画 内容構成

診断の定義 要因（関連因子・危険因子） 目標 OP（観察計画）

TP（ケア計画）EP（教育計画） 評価項目

(研究2)(研究3)

全国訪問看護事業協会会員事業所全数 5240 箇所

2) 調査期間

2018年2月1日～2018年4月15日

3) 調査方法

自記式質問紙調査

4) 調査内容

質問紙調査は、1)基本調査票と2)調査票1を行った。その内容は次のとおりである。

(1) 基本調査票

対象の背景および看護診断使用に関することを質問した。その項目は、事業開始の時期、所在する都道府県、法人等種別、併施設設事業、加算届出、職員職種別数、職員の年齢、認定看護師・専門看護師の有無、看護診断の使用の有無、看護診断の使用状況、看護診断使用後の効果、看護診断不使用の理由、看護診断以外の表現の必要性について、とした。

(2) 調査票1

本調査に先立ち、研究者（訪問看護ステーション所長（訪看護認定看護師）2名、訪問看護ステーション主任3名、病院退院調整看護師（訪問看護認定看護師）1名、大学教員1名）の合議により、NANND-I(2015-2017版)に掲載された235診断名について、在宅において使用頻度の極めて低い25診断名を除外し、210を調査対象診断名とした。それらの使用頻度を、よく使う「4点」時々使う「3点」まれに使う「2点」使わない「1点」の4段階リカートスケールとして、得点が高いほど使用頻度が高いとした。

(3) 調査票2

看護介入の着眼点として何を看護上の課題にあげ、看護計画の中でどのような表現で示しているのか自由記述で記載してもらった。

5) 分析方法

SPSS for Windows 21V.を用いて、記述統計量と推計統計量を算出した。

6) 倫理的配慮

訪問看護ステーション宛てに調査票を依頼する際、依頼文に本調査の目的と方法を明記し、これに同意し、協力の得られる場合のみ対象者とする事、調査は無記名であること、調査は本研究以外の目的では使用しないことを伝えた。また、本研究は奈良県立医科大学医の倫理委員会の承認（番号1730）を受けて実施した。

4. 研究成果

(研究1) 15診断名に対する在宅用訪問看護計画を策定し、冊子にまとめ、N県の訪問ステーション協議会で配布した。

(研究2)(研究3)

1) 回収状況

総回収数 540 (回収率 10.80%)      基本調査票 536 (回収率 10.71%)

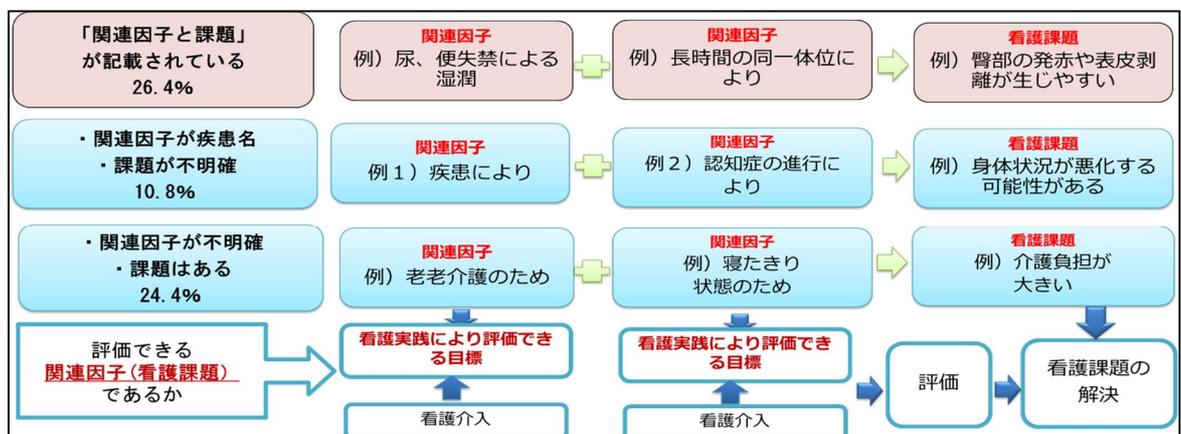
調査票1 159 (回収率 3.18%)      調査票2 247 (回収率 4.92%)

## 2) 訪問看護ステーションにおける使用頻度の高い看護診断および看護課題について

全体（調査票1+調査票2）		調査票1		調査票2	
調査票1+調査票2 使用頻度1位~20位まで 【分析対象診断名1138】		調査票1 使用頻度1位~20位まで 調査票159×3=477診断名 うち、39無記入 【分析対象診断名438】		調査票2 使用頻度1位~20位まで 調査票246×3=738診断名 うち、33無記入+内容不明5 【分析対象診断名700】	
看護診断名	使用数	看護診断名	使用数	看護診断名	使用数
便秘	109	皮膚統合性障害	46	便秘	71
介護者役割緊張	96	便秘	38	介護者役割緊張	65
皮膚統合性障害	88	介護者役割緊張	31	転倒転落リスク状態	64
転倒転落リスク状態	82	不安	22	皮膚統合性障害	42
非効果的健康管理	51	感染リスク状態	20	非効果的健康管理	34
不安	50	転倒転落リスク状態	18	誤嚥リスク状態	31
誤嚥リスク状態	44	非効果的健康管理	17	安楽障害	29
感染リスク状態	43	褥瘡リスク状態	15	不安	28
安楽障害	38	誤嚥リスク状態	13	感染リスク状態	23
褥瘡リスク状態	38	身体可動性障害	12	褥瘡リスク状態	23
身体可動性障害	26	嚥下障害	10	身体可動性障害	14
入浴セルフケア不足	23	安楽障害	9	入浴セルフケア不足	14
高齢者虚弱シンドローム	16	入浴セルフケア不足	9	社会的相互作用障害	12
非効果的健康維持	15	不眠	8	非効果的健康維持	12
活動耐性低下	13	身体損傷リスク状態	7	高齢者虚弱シンドローム	11
排泄セルフケア不足	13	活動耐性低下	6	活動耐性低下	7
社会的相互作用障害	12	排泄セルフケア不足	6	排泄セルフケア不足	7
不眠	11	高齢者虚弱シンドローム	5	非効果的コーピング	7
嚥下障害	10	慢性疼痛	4	健康管理促進準備状態	6
非効果的呼吸パターン	9	急性疼痛	3	非効果的呼吸パターン	6

## 3) 看護計画における看護課題の表記について

	原因または関連因子1 (徴候と症状)	原因または関連因子2 (徴候と症状)	看護の課題	n=695 数(%)
「関連因子と課題」 が記載されている	例)尿、便失禁による湿潤、 例)腸蠕動運動の低下や、	長時間の同一体位により 腹圧が十分にかけられないことにより	臀部の発赤や表皮剥離が生じやすい 排便困難の状態になりやすい	195 (26.4%)
関連因子が疾患名 課題が不明確	例)疾患により 例)認知症の進行により		身体状況が悪化する可能性あり 日常生活に支障をきたしている	80 (10.8%)
関連因子が不明確	例)老老介護のため、 例)寝たきり状態のため、		妻一人の介護負担が大きい 皮膚障害をきたしやすい	180 (24.4%)
「課題のみ」 記載されている			誤嚥性肺炎を起こす可能性がある 介護者の介護負担が大きい	89 (12.1%)
「状態のみ」「必要性のみ」 記載されている	例)症状をうまく表現することが出来ない 例)疼痛	例)病状の悪化 例)尿カテのトラブル		69 (9.3%)
「対象者の目標」 が記載されている			例)後悔なく在宅で看取れる 例)転倒せず自宅での生活が拡大する	53 (7.2%)
「看護介入の目標」 「看護の介入」 が記載されている			例)言葉による暴力が予測され、家族調整を行っている 例)末期癌療養者を抱える家族の予期悲嘆への かわりと介護指導	23 (3.1%)
「きぼう~したい」 が記載されている			例)ADLを保ち元気に過ごしたい 例)安心して施設で生活したい	6 (0.8%)



□ (研究1) 研究目的に対する結果・考察

**在宅用標準看護計画の妥当性**

訪問看護協議会の研修会で配布し、在宅用標準看護計画の策定の経緯、全国調査の結果を含めてその内容を説明した。在宅用標準看護計画の内容に対する意見求めを行い、追記修正点がないことを確認した。

□ (研究2) 研究目的に対する結果・考察

**在宅用標準看護計画策定のために掲げた看護診断名の妥当性の検証**

調査結果より、上位25位までに15診断名中11診断名があり、50位までに「社会的相互作用障害」を除く全てが挙げられた。したがって、在宅用標準看護計画の15個の看護診断名は、訪問看護において使用頻度が高く妥当であるといえる。

□ (研究3) 研究目的に対する結果・考察

**1. 訪問看護師が「看護介入の着眼点」として何を看護上の課題にあげているのか**

全国の訪問看護ステーション5240を対象に「訪問看護師の看護介入の着眼点」について、日常の看護計画において示している「看護の課題」から明らかにした。その結果、「便秘」「介護者役割緊張」「皮膚統合性障害」「褥瘡リスク状態」

「転倒転落リスク状態」「不安」「非効果的健康管理(服薬管理不足、疾患に関する留意点の理解不足)」「誤嚥リスク状態」「感染リスク状態」「安楽障害」の順で看護の課題が抽出された。

介護者の高齢化、独居、認知症の増加、誤嚥性肺炎による入退院の増加、終末期看護の増加等「社会の課題」が看護の課題として抽出されており、その点が在宅看護の特徴であると考えられる。

**2. 在宅における看護計画が持つ課題は何か**

看護課題やその関連因子が不明確なものは、73.6%と多く、また、看護課題や関連因子の表記が疾患や高齢のため等)となっており、看護介入によって評価できない内容が多く見受けられた。看護課題の根拠となる関連要因は、対象者の全体像のアセスメントの結果であり、看護計画に明記する必要がある。このことにより、常に個別性と看護実践の根拠の意識づけにつながり、看護の質の向上のためにも、この課題に取り組むことが必要であると考えられる。

以上

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 奥田真紀子 伊藤絹枝 伏見美貴子 梶原篤子 東田慶子 辰巳恵理 田丸勝巳
2. 発表標題 全国訪問看護ステーションにおける看護介入の着眼点に関する実態調査
3. 学会等名 日本在宅看護学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 奥田真紀子、伊藤絹枝、伏見美貴子、梶原篤子、東田慶子、辰巳恵理
2. 発表標題 全国訪問看護ステーションにおける看護診断使用に関する実態調査
3. 学会等名 日本在宅看護学会
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	栗田 麻美  (kurita mami)  (00574922)	奈良県立医科大学・医学部・講師    (24601)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------